

ライブラリー・ツインズ



Alicekan



日野祐希

あけたらしろめ・絵

LIBRARY TWINS

もくじ

第一章	夏休みとボランティア	4
第二章	大学図書館	40
第三章	波乱の手製本	88
第四章	活躍と役割 かつやく	124
第五章	準備と挑戦 ちようせん	176
第六章	ホームカミングデー	204
エピソード	またあの場所を目指す	244
あとがき		252

第一章 夏休みとボランティア

窓から見える真っ青な空の中を、一本の飛行機雲が走っていく。それを自分の席から見上げながら、菜織は思った。自分も、早くこの教室から飛び出したいと。

「フフフ。今年の夏は、海へ行つて、プールへ行つて、山でキャンプ」
菜織は鼻歌交じりに、明日からやることを指折り数える。

なぜなら今日は、一学期の終業式なのだ。明日からは、待ちに待った中学生生活最後の夏休みが始まる。テンションを上げるな、という方が無理な話である。

世間的には、中学三年生の夏休みといえば、受験勉強一色というイメージだろう。

しかし、そんな世間の常識も、菜織には当てはまらない。なぜなら菜織が通う月島大
学附属中学校には、附属高校への内部進学という制度があるから。



よって、菜織は何も心配することなく夏休みの計画を立てているのだった。

「次、本郷菜織」

「あ、はい」

担任に名前を呼ばれた菜織は、教卓の前まで出て行って通知表を受け取る。席にもどりながら確認したその成績は、10段階評価で平均4・5。ちなみに体育だけは堂々の10点満点。体育がなければ、平均は4・3くらいだっただろう。いつも通りの微妙な成績だ。

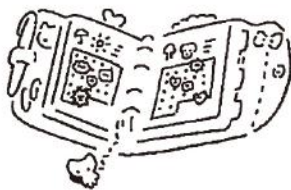
しかし、通知表を見た菜織は、「よし!」とこぶしを握ってガッツポーズをした。

「ずいぶんうれしそうだな。そんなにいい成績だったのか?」

菜織が浮かれ気分のまま自分の席に着くと、となりの席から声をかけられた。そこには、菜織とよく似た顔立ちの男子生徒が座っている。双子の弟の健史だ。ちなみに、顔立ちはそっくりな二人だが、菜織はたれ目で健史はつり目。そして、雰囲気の違いから、「あまり似てないね」とよく言われる。

菜織はそんな弟に通知表を渡し、ドカッと座ったイスにふんぞり返る。

「そりゃあ、喜びもするわよ。私もこれで、内部進学が確定したんだから。まあ、この間の期末テストも全教科平均点近くいったし、大丈夫だったのはわかって



いたけどね」

「いや、『確定した』ってお前……。この成績、普通にやばいんじゃないか？」
自信満々な姉へ、健史はあきれたと言わんばかりの眼差しを向ける。

そう。内部進学の場合は、附属中学校の生徒全員に与えられるわけではない。三年一学期の成績をもとに、上位四分の三の生徒がもらえる権利なのだ。

その中で、平均4・5という成績は——はつきり言っただけならいい。当落線からすべり落ちていても、まったく不思議じゃない。

「大丈夫よ。ほんと、健史は気が小さいっていうか、心配性ね」

しかし、そんな成績を取った当人は、弟のあきれ顔なんてどこ吹く風。自信たっぷりな態度を崩すことなく、またもはつきり「大丈夫」と言い切った。

「ずいぶん自信があるみたいだけど、何か根拠でもあるのか？」

「だって私、この間、陸上部の子に聞いたもん！ 去年、内部進学した陸上部の先輩、成績の平均が4・2で、期末テストも英語が追試ギリギリだったって。私の成績はその先輩よりも上なんだから、内部進学できない理由がないじゃない！」

まだ疑いの眼差しを向けてくる弟へ、菜織は自信の理由を話す。

これは確かな筋の情報だ。そして、各学年の生徒のレベルは、そう大きく変わったたり

しない。だったら、今年も同じ理屈が通るはずだ。

「まあ見てなさい。冬になったら、きちんと私にも内部進学案内が届くから」

「お前が本当にそう思っているなら、僕は別にいいけどさ」

健史が、あきらめたとしても言いたげなため息をつく。

菜織はそれを見ながら、ため息をつきたいのはこっちだ、と思った。

この弟は頭がいいのだけど、いちいち細かいところを気にするのが悪いところだ。将来絶対に、心配性が原因ではげると思う。

ともあれ菜織は健史の手から通知表を回収し、そのままうちわのようにして自分をあおぐ。内部進学の風は、実に気持ちいい。

そうこうしているうちに、担任が通知表を配り終わったようだ。

「ほら、静かにしろ。お前たちも、さっさと帰りたいだろう？ ちゃっちゃと連絡を済ませるぞ」

ゆるみ切った教室全体に聞こえるように、担任が手を打ち鳴らしながら言う。

菜織のクラスの担任は二十代後半と若いのが、その分、生徒の考えをよくわかっている。早く帰りたいというのは、クラスの全員が思っていることだ。よって、誰も担任に逆らうことなく、おとなしくむだ話をやめて、前を向く。

もちろん菜織も、通知表で自分をおぐのをやめて、担任の方に注目した。

「よし。それじゃあ、よく聞けよ。まず夏休みだからといって、羽目を外し過ぎないこと。夜中に歩いたりするんじゃないぞ。それから――」

夏休み前恒例の注意事項を、担任が教科書を読み上げるかのようにしゃべっていく。そして、菜織はそれを右耳から左耳へと素通りさせていった。

小学校と中学校で、長期休みの度に同じような注意を聞いているのだ。もう耳にタコができそうなくらい聞き飽きている。

そんな担任からのありがたいお話も終わり、連絡もすべて聞き終わって、ようやくホームルームもお開き。日直の号令で礼をして、ついに夏休み突入だ。

「ふんふんふーん。夏休みー」

プリントやペンケース、通知表を通学用のリュックサックへ放りこみ、菜織がさっさと席を立つ。

頭の中は、帰ってから何をするかでいっぱいだった。心がおどって仕方ない。だが、その時だった。

「あ、そうだ。本郷姉弟、ちょっと来い」

教室を出ていきかけていた担任が、思い出したという顔で菜織と健史を呼んだ。

それと同時に、菜織のテンションが目に見えて下がった。楽しさ満点のところに水を差された気分だ。

しかし、担任からの呼び出しを無視するわけにはいかない。菜織はリュックサックを机に置き、健史といっしょに教室の入り口のところで待つ担任のもとへと向かった。

「おう、二人とも。すまん」

「いいですよ、別に。それで、なんか用ですか、先生」

あまりすまないと思っていなさそうな担任へ、菜織もややぞんざいな口調で応じる。健史の方は特に何も言うことがないのか、無言のままだ。

「用と言えば用だな。主に姉の方へ。まあ、弟にも頼みたいことがあるんだが」

「私に用事？」

「僕に頼みたいこと？」

担任の言葉に、菜織と健史は完全同期した動きで首をかしげた。

「そうそう。そんじゃまあ、ここで話すのもあれな内容なんだな。」

二人とも、ちょっと職員室まで来てくれ」

そう言うと、担任は二人の返事を待たずに歩き始める。

残された菜織と健史は、顔を見合わせてもう一度首をかしげるも、

